

○小林 綏枝* 田口 秀子* 逸見 洋子* 菅原 正子** 佐藤 了子**

(秋田大教育文化* 岩手県立大盛岡短大部** 聖霊女短大**)

目的：近年、家族の生活形態は多様で、高齢者がケア付きの住宅で生活する事例も多く、公的な施設も増加している。ケアハウスは原則的に高齢者の身辺自立が可能であることを目的とした住居で、その生活環境は限られた空間であるが生活面での制約も多い。そこでケアハウス入居高齢者の身辺自立をふまえた生活環境実態について調査を行った。

方法：秋田県と岩手県のケアハウス入居者を対象とした。年齢は63～99歳の男女340名で四季にわたってアンケート調査を行った。回収率は58.2%、有効回答数は196名である。

結果：身辺自立の指標となる洗濯（洗う、干す）掃除（用具、回数）、寝具の片付けについては男女の相違がみられ、その実行頻度は男女で異なる。自室の環境管理は温湿度計を備えている者は少なく、一年中ほこりが気になるのは男であった。冬期には全館暖房であるが、こたつ、電気毛布、ホットカーペット、エアコン等で各自の環境をコントロールし、快適である人は80%となっている。また、着装衣服は、季節によって差があり下着によって四肢をカバーする面積を加減し、上着は寒さに対して割烹着、上っぱり、ベスト、トレーングウェアで対応、下衣には季節による変化はみられないが、ウエストにゴム使用のズボンが多い。日中の衣服着脱は少ないが、外出時には約半数が着替えている。外出の目的は病院、散歩が多く、バスで1～2時間、晴れの日が多く、着装感は快適と感じている。また、外出時に着替えをする人は多いが、日常着に上衣だけという着装行動も見られた。以上の結果から、高齢者が家族と離れても居住する環境が整い、食事の提供があれば、高齢者自らの生活管理が可能であるという実態が明らかになった。